主図版① 「亦復如是…繁茂衆鳥…」

亦復如是

繁茂衆鳥

写経 ①『六朝写経断簡』（りくちょうしゃきょうだんかん） 4～5世紀頃

図版③　談書会誌より

図版②
原寸図版・下端の一部を省略

近代に入り、敦煌の石窟から夥しい量の、宋代前の文書が発見された。3、4世紀から13世紀のものである。古代の書の古典の多くは、金石文が主であり、金石文は、拓本にとられたものが学ばれてきた。書聖・王羲之の真蹟は、この世には一片たりとも伝えられていない。書の学習において、唐時代前の信頼性のある真蹟は、実に稀であり見ることができなかった。ところが敦煌文書の発見により、古い時代の真蹟が取り上げられるようになった。戦前の書道界では、『談書会誌』（明治42年に第1号を刊行、昭和2年100号で終刊、日下部鳴鶴を始めとする書家、文化人が参加、和漢の名蹟を紹介する。発行人・河井仙郎）が、大正6年の52号あたりから大正7年8年にかけて数号にわたり30数件の敦煌文書を紹介している。当時西域を調査してきた大谷探検隊の将来品である。談書会誌の目次には、大谷家所蔵とある。書法的に珍しく優れたものは、筆跡を見やすくするために大きく拡大してある。これまで眼にすることの無かった北魏前期の北涼時代、または西晋時代とされる写経の残片の拡大図版は、当時の方に大きな衝撃を与えたのでは無かろうか（図版③）。今回、右の主図版に示した8字は、家蔵の北涼写経断簡の一部である。左頁には同じ部分の原寸図版も示した。1センチ足らずの小さい文字であるが、大きく拡大してもその魅力は、衰えることはない。起筆は細く鋭く、楷書成立前の書法であろうか。（数回にわたり、中国の写経を紹介します。）

この欄に関するご批評、ご意見、ご希望、ご質問などをお聞かせください。私宛に直接メールで、また編集部宛にお送りただければ幸いです。

伊藤滋　メールアドレス
mokkei@galaxy.ocn.ne.jp

書道芸術院
平成の群像（2015）

第66回毎日書道展 「楽」

知野洛水

前衛書と私

「書」を本格的に始めたのは昭和44年に故浜田一堂先生から故中島邑水先生を紹介され、それ以来今日まで古典の臨書を中心に、展覧会では「前衛書」を発表してきました。

邑水先生は常に古典を追求され、「書美の根源は線にあり、新しい書の創造は古典を基底として発展する。」と言われて、最初に手ほどきを戴いたのは龍門二十品（牛橛造像記）他であります。いきなりその年の第21回毎日書道展「前衛書部」に出品することになった。初めての作品を作成するに当たって、先生は「文字の意味を考え、真っ黒に墨を磨り、たっぷり筆に墨を含ませて心にある思いを終筆まで力を抜かず書き上げればできる、とにかく書いてみろ。」と言われた。その後も、濃墨作品を中心に制作してきましたが、しばらくして濃墨から淡墨の作品を書きたいと思い先生に相談すると、「君は、私が許すまで淡墨で書いてはならない、濃墨で書いて書いて書きまくれ。」と言われ、その後淡墨で書くことの許しを戴くことはありませんでした。

その後、村野大仙先生にお世話になり、村野先生も中島先生の「書の精神」を受け継ぎ古典の研究をされており、村野先生の作品は特に墨彩が美しい。一本の線に込められた力強さに憧れ、ご指導を戴き淡墨の作品を出品するようになった。淡墨は墨、紙、水、筆それぞれの呼吸とリズムによって、独特のにじみのある作品が生まれます。ただ淡墨の魅力にばかり頼り過ぎると素朴で力強い線が失われることがあります。

前衛書作品の制作にあたっては、濃墨であれ、淡墨であれ細心の注意をはらい一本の線に「生命」を込め「無心」で書き上げ、見る人に感動と安らぎを与える作品を書き上げることです。

これからも古典と向き合い、「一点一画」、「一字一字」に創造性を発揮し自分の書の世界を広げ新しい前衛書の創造を目指して頑張って行きたいと思います。今後とも温かいご指導、ご鞭撻をお願いします。

書のひろば

理事長　辻元大雲

第67回毎日書道展閉幕・地方展へ

国立新美術館と東京都美術館にて開催された第67回毎日書道展は昨年より入場者数も飛躍的に増加し盛況のうちに東京展が閉幕した。企画展示「筆・墨・紙・硯の世界」が大変好評を博し、内外からの反響も大変なものであった。

今後関西展（京都）を皮切りに12月まで地方展が9会場にて開催される。地方展では本院会員のご協力も大変なもので深く感謝申し上げたい。

・関西展（京都）8／5～9
・四国展（愛媛）8／12～16
・北陸展（富山）8／23～27
・東海展（愛知）8／25～30
・中国展（広島）8／25～30
・東北仙台展（宮城）9／18～23
・北海道展（北海道）9／23～27
・東北山形展（山形）9／30～10／4
・九州展（福岡）12／1～6

第51回単位認定書道芸術院講習会秋保会場で盛況に

本院恒例の単位認定講習会が本年度は東北総局主管で宮城県秋保温泉岩沼屋を会場に開催された。宮城での開催は4年半前の東日本大震災の影響でのびのびとなり18年ぶりの開催となった。会場となった岩沼屋のコンベンションホールは広々としていて、参加者も220名余と昨年の高野山会場に匹敵する大人数となった。役員を合わせると250名余となりさしもの大会場も狭く感じるほどであった。

講習内容は実技（漢字・かな・現代詩文書・篆刻刻字・前衛書）に書写、一般教養として原拓書道史、書道芸術院史と盛り沢山で、受講生にはややきつい講習内容であったと思われるが皆さん真剣かつ積極的に各講座を受講されていた。

会場には恩地春洋顧問も激励にお出で頂き、参加者は次回開催予定の九州支局を含め全国各地からお出で頂き充実の2日間であった。詳細は次号にて報告される予定。

熱気溢れる講習会場

2016 現代の書新春展出品者決定

来年1月初頭に開催予定の「現代の書新春展」の出品者が選考委員会（毎日書道会理事監事代表及び外部選考委員）により決定した。今後作品サイズの指定などが行われ具体的な準備が進められる。（以下院関係出品者）

和光会場　辻元大雲・下谷洋子

セントラル会場100人展（今回は65歳以上の審査会員より選抜）

飯高和子（近詩）石井明子（かな）
大野祥雲（大字）小竹石雲（近詩）
後藤大峰（刻字）小林琴水（大字）
最首翠風（漢字）坂本素雪（近詩）
砂本杏花（近詩）畑中弄石（近詩）
浜谷芳仙（前衛）村野大仙（前衛）

平成27年度秋季展審査会員候補公募入賞者決定

会期　10月6日～10月11日
会場　セントラルミュージアム銀座
出品者　財団役員（顧問・理事・監事・評議員・参事）、審査会員選抜（参与会員選抜を含む）
審査会員候補公募入賞者（50名）
（出品者236名、387点）

＊秋季菊花賞
（漢字）篠原楊流、田中喜美枝、生田珠翠
（かな）治田芳江
（現詩）田澤館楓、大野清玉
（篆・刻）田代明眸
（前衛）須藤彰仁、畠中成山、遠藤紅杏

＊秋季俊英賞（篆刻・刻字は該当なし）
（漢字）筒井寿子、河岡北秀、森田藤谷、諸富玖扇、今関心華、板橋雅邦、旭　筝陽、吉瀬彩雨、一森映泉、猪又理扇、土屋恵仙、鶴田恵子、樋井鷹春、井ノ口春峰、青木藤漣
（かな）京　絹子、清水由紀子、高橋正子
（現詩）市川紫泉、佐々木一峰、金野翠苑、相澤正華、佐藤弦佳、土橋芳子、木村順峰、蔵村登美、菊池慶燁、波多祥舟、茂木絢水
（前衛）金井みどり、近藤桜紅、小此木白洋、千葉光泉、田名部茜香、工藤山房、佐々木紅楓、河端祥桜、鈴木恵風、廣瀬幸枝、伏津玲子

秋季展関連日程

・表彰式・研究会
日時　10月6日（火）13：30より
会場　紙パルプ会館2階ホール
参加自由です。多数ご参加下さい。

・祝賀会　同日17：30より
会場　コートヤードマリオット銀座東武ホテル

＊会場の都合で今回は秋季展作品展示出品者のみに限定させていただきます。ご了解ください。

・推薦作家展　会場　アートサロン毎日
出品者　生田翠龍・勝山初美・佐藤香山・宮崎芳玉・横田汀華

現代詩文書 (六)

田村鄭雲

揮毫について

筆は大きい物を2本用意したが、どの筆も肉厚が足らず、文字を増やすか、筆を変えるか悩んだあげく後輩の大隅君に借りて、その1本と手持ちの1本の2本を合わせて使うと、希望する線質に近づいた。おそらく羊毛のふっくらした温和な線質と馬毛の切れ味の良さが調和した結果だと思います。

この2本に墨をたっぷり含ませ、吊り上げたまま筆の一番弾力の効いた箇所で紙面に押しつけないよう運筆する。穂が真下にある場合は良いが、体から離れると益々重くなる。普段鍛えていない私は腰が痛くなり、整形外科に通いながらの制作でした。

A3の構想どおりに書けないのは、大きな筆の動きは、小さい物と全く違うと言うことでした。大作の場合、構想にとらわれない方が良いでしょう。

最後に、この作品制作に当り御指導頂いた辻元大雲先生は勿論のこと、多くの先輩や同僚にお礼申し上げます。

また、多くの方にご高覧頂き、ご批評頂いたことに感謝致します。

21世紀の書

―私の主張―

前衛書 (六)

太田蓮紅

―永遠のテーマ―

長い年月前衛書部に所属し、多くの先生方に育て導いていただき今日がある。分からぬまま始めた道だったが、現在は鑑賞力、指導力も付き魅力も伝えられるようになったと思う。若手が振り返ればもう中堅を過ぎる年令であるが、前衛書への情熱は尽きない。

書は平面芸術である。それゆえに立体性に憧れるのである。どうすれば立体的に見えるのか様々な試みをしたが、今だに満足するものはない。私の考えなどはすでに先人の先生方が経験済みの事であり、自身の思考力、創造力の貧困さを痛感させられる。今後の活動の中で立体感を出せる作品を制作することが目標でもあり、チャレンジでもあり、永遠のテーマでもある。

掲載の作品は、みやぎの書60人展出品作。この企画はジャンルの異なる（前衛・近詩・大字書）部門で、「白と黒」のテーマで制作した。平面の三部門の作と一つのキューブと配置し、それぞれの終画、飛沫、印などを、キューブに集め三作を一体化した。前衛書は濃墨の黒を主体とした作で左下部の部分を破り、下より異った白を主体とする作品が見える表現である。果して結果の是非は不明であるが、制作者三人の意見や互いの相乗効果があったのも事実で、大切にしたい経験でもある。

（自作は写真左、キューブ正面）

平成27年度 新審査会員作品

衣田琴草（漢）・大村直子（前）・福留千代華（現）

衣田琴草
（奈良）

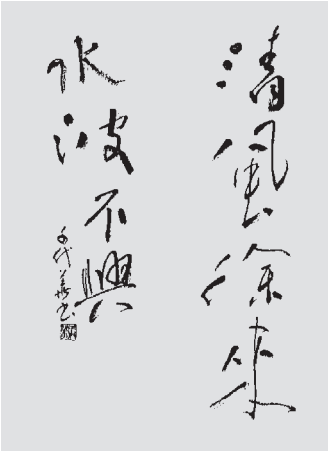
「遊」

この度は審査会員に昇格させていただき、恩地春洋先生、小林琴水先生はじめ諸先生方に感謝しております。

「遊」には楽しむという他に、自由に動けるという意味があり、いつか筆を自由に動かし、人の心を打つ書を書ける様になれればと思います。そのためにも、より深く学び精進してまいります。

（琴草）

福留千代華
（鳥取）



「清風徐来水波不興」　蘇軾

古の英雄達に思いを馳せ、悠久の自然を楽しむ様を詠じた詩の一節です。文字の空間を大切に表現しました。

これまでご指導いただきました先生方、仲間や家族の支えもあり書を続ける事が出来ました。今後は心穏やかに書く事を楽しみながら作品に取り組みたいと思います。

（千代華）

大村直子
（東京）

「鳥」

村野先生のわかりやすく熱いご指導、親切で書道への情熱溢れる諸先輩方、また亡くなる直前まで向上心の大切さを身をもって示して下さった故金子魯完先生。お世話になった多くの先生方に心より感謝申し上げます。

今後も一層努力し精進して参りたいと思います。

（直子）

特集 第67回 毎日書道展

文部科学大臣賞

下谷洋子

この度、本当に思いがけず文部科学大臣賞をいただきました。一報を受けたとき、先ず私の作品などがいただいて良いのか、どうしよう！でした。

思い起こせば、幼い頃より書は身近なもので環境にも恵まれてはいましたが、書家としての自覚が出来たのは随分後になりました。諸事情により早くから師と離れたため、自由ではある反面、試行錯誤の連続でもありました。その迷いつつ歩んできた道を一度整理しようと、5年前個展を開き、結果毎日書道顕彰を頂戴しました。顕彰を頂いたからといって、いつも願う作品が書けるわけではありません。また振り出しに戻り、かなと格闘する日々が続きました。ただ、かなに向かう意識がかなり変わったことは成果だったと、今にして思いますが。

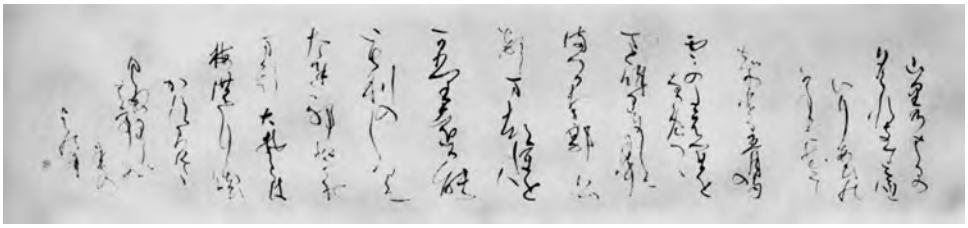
今回の作品は、いろんな偶然が重なって生まれたものです。評価していただいたことはこの上もなく光栄ではありますが、決して満足のいくものではありません。かなは、書は奥深く、追求するほどに迷路にはまります。でも、その悩む時間さえも愛おしく、私という生が染み込んだ現代のかなを書きたい。果てしない夢に向かって、また一歩一歩、一瞬一瞬を大切に学んでいきたいと思います。

常に暖かく見守って下さった先輩の先生方、刺激的な仲間、そして私を育ててくれた社中の皆さんに心から感謝申し上げます。

ありがとうございました。

かな　下谷洋子

会員賞



かな部　松村　くに子

松村　くに子
（かな部）

この度の会員賞、誠に有り難うございました。これも、下谷洋子先生のご指導、書道芸術院の先生方、また書泉会会員の皆さんのお陰であると厚く感謝申し上げます。

今回、「自然に流れる」ということをテーマにしました。そのように筆が動くまで書こうと思い始めましたが、書けば書く程分からなくなり、とても苦労致しました。出品する直前に、やっと少し穏やかな気持ちになれ、書き上げることが出来ました。

今回、師の文部科学大臣賞と同時に受賞出来ましたこと、大変感動を致しました。と同時にこの栄誉は、これからの自分の書に対しての、あり方・叱咤・激励であると強く感じました。

さらに精進を重ねていくことが、ご恩返しと心得ます。

会員賞

目良　泰幽
（近代詩文書部）

この度第67回毎日書道展に於きまして身に余る会員賞を戴き衷心より厚く御礼申し上げます。

これも偏えに師飯高和子先生、亡き種谷扇舟先生のご指導のお蔭と深く感謝致しております。

私の書との出会いは小学校3年、50年前になります。縁あって飯高和子先生の書塾に毎週1時間かけて通い、他の書塾では経験できないさまざまな書をご教授戴きました。私の近代詩文書の起源はそこにあると思います。

近年、僧侶としての身をいかすべく経文を題材にしております。今まで横作品が多く今回もそのように制作を始めたのですが、行き詰まってしまいました。しかし、気分転換に一枚書いた縦作品に、この形で書き込むようにご指導を受け書き続けるうちに新しい世界がかすかに見えて来たように感じられました。

今後は受賞の責任を心に刻み精進努力致す所存でございますのでご指導の程宜しくお願い致します。

近代詩文書部　目良　泰幽

第67回毎日書道展総評

辻元大雲

第67回目を迎えた毎日書道展は2月の運営委員会から具体的に始動した。今回展は実行委員長として辻元大雲が、総務部長に下谷洋子本院常務理事、総務部長補佐に種谷萬城本院理事が担当することとなり、その他の主要役職でも本院関係者が担うこととなった。4月中旬の事務局合同会議を経て、5月下旬の鑑別、6月下旬の審査と順調に運営され、巨大な毎日書道展の組織力を大いに発揮した。

公募会友の出品数は昨年より微減の2万9560点となり、3万点の大台には届かなかったものの大勢への影響はあまりなかった。

今回展で特筆されることは毎日書道展全体を通して最高の栄誉である「文部科学大臣賞」に本院下谷洋子常務理事が選考されたことである。本賞には第50回展で故種谷扇舟会長が受賞されて以来の快挙であり、大いに慶賀したい。更に昨年10月「ふるさと吉備を書く」と題して東京銀座画廊にて開催された小竹石雲書展が高く評価され「平成26年度毎日書道顕彰」に輝き、67回展表彰式に先立ち授与されたことである。お二人の快挙は本院に取り二重の慶びとなり、展覧会運営の中核を担うことと併せ内外に本院の存在を大きく印象付けることとなった。

また会員賞にはかな部で松村くに子、近代詩文書部で目良泰幽の両氏が受賞されたことも重ねての慶事であった。会友・公募、U23の各部門での入賞、入選の成績も例年を上回る結果を残し、総じて今回展は書道芸術院の勢い、エネルギーが大いに発揮された年となった。数値的な内容は下表をご覧いただきたい。

恒例となった企画展示は「筆・墨・紙・硯の世界」と銘打って、普段身近に接している文房具に焦点を当て、関係業者提供による諸用具、用材のルーツ、製法、製品展示、毎日書道展先達の先生方ご愛用の名品を展示、更に毎日書道会理事監事による指定された用具用材を使用して揮毫した作例を用具とともに展示し、併せて連日制作者によるギャラリートークが午前午後2回開催され、参観者は企画展示室に溢れ大変な盛況であった。本企画展示は毎日書道会企画委員会による計画運営であり、正に手作りの展示発表であり、内外に大きな反響を呼び大成功を納めた。但し今回限りの展示となり、関連する印刷出版物は作成されないため図録など記録の要望が多く寄せられた。毎日書道会としての基本的な記録はされるようであるが、このまま終わらせることは勿体ないことで、将来への活用を期待したい企画であった。

会場は例年通り国立新美術館（7／8～8／2）と東京都美術館（7／16～7／23）の両会場で開催され、入場者数も昨年を大きく上回り、連日大盛況であった。7月19日にはザ・プリンスパークタワー東京にて表彰式他関連行事が開催された。10：30より東京芸術大学宮田亮平学長による講演会が同ホテルにて行われ、会場いっぱいの400余名の聴衆で盛会であった。演題は「夢を探そう」。会場後方から突然話し始めるハプニングで会場騒然、絶妙な語りとスライドを駆使してのビジュアルで具体性ある内容に聴衆は心奪われる講演で、すばらしい一刻であった。

午後からの表彰式は2000余名が集う壮観な会場で、厳粛な中に心こもる式典であった。冒頭平成26年度毎日書道顕彰が小竹石雲、日本書道院の髙橋静豪両氏へ贈呈され、67回展表彰式では朝比奈毎日新聞社長、辻元大雲実行委員長などのあいさつに続き授賞のトップは文部科学大臣賞が下谷洋子さん、会員賞以下各賞が授与された。式後記念撮影、隣のコンベンションホールでの祝賀会で最高潮に達した。下谷洋子、小竹石雲両氏のお礼のあいさつなどを交え大盛況であった。

その後書道芸術院関係者による出品者祝賀懇親会が近くの芝パークホテルにて、200余名の参加者、毎日新聞社三岡文化部長、書道会西村事務局長などご来賓にご来駕頂き、和やかにまた大いに盛り上がった祝宴であった。

本展は東京展の後、関西展(京都を皮切りに全国9会場で12月まで開催されることになっており、各開催地では展示のほか顕彰式、作品解説会・揮毫会、祝賀会など多彩な内容で例年大いに盛り上がりを見せる。各開催地での役員として本院会員の活躍は目覚ましく、大いに貢献していることも特筆される。ご協力を感謝申し上げたい。

第67回展出品数

書道芸術院	漢字		かな		近代詩文書	大字書	篆刻	刻字	前衛書	合計
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ						
本年度	239	209	130	154	542	205	0	91	455	2,025
前年	188	244	122	147	518	206	0	98	479	2,002
増減	51	-35	8	7	24	-1	0	-7	-24	23

第67回展書道芸術院受賞者数

賞名	漢字		かな		近代詩文書	大字書	篆刻	刻字	前衛書	合計
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ						
文部科学大臣賞			1							1
会　員　賞			1		1					2
毎　日　賞	4		1	1	4	2		1	3	16
秀　作　賞	3	2	4	2	8	4		2	8	33
佳　作　賞	8	5	2	7	16	8		3	14	63
U23毎日賞										0
U23新鋭賞					1	1				2
U23奨励賞			1		1				2	4
合計	15	7	10	10	31	15		6	27	121

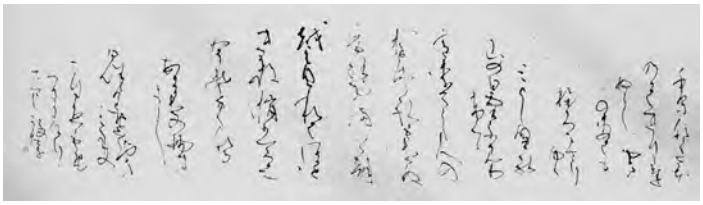
毎日賞

漢字部Ⅰ類　安部千恵

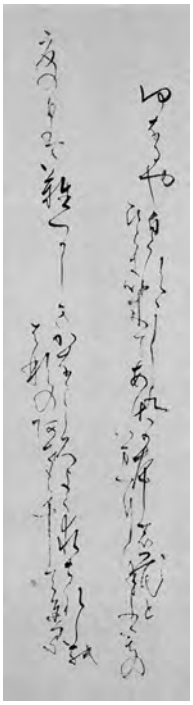
漢字部Ⅰ類　大和田晴水

漢字部Ⅰ類　小川白柳

漢字部Ⅰ類　三木江竹



かな部Ⅰ類　稲村由宇記



かな部Ⅱ類　藤村昌子

近代詩文書部　大野清玉

近代詩文書部　鈴木承琳

毎　日　賞

大字書部　横井正江

大字書部　浜口瑞香

近代詩文書部　阿部恵泉

刻字部　高橋芳琴

近代詩文書部　天野白扇

前衛書部　藤原紅雲

前衛書部　田子恵琉

前衛書部　高原梨秀

秀作賞受賞者

・漢字部（Ⅰ類）
青木藤漣　谷田熾扇　仲倉恵堂

・漢字部（Ⅱ類）
板橋雅峰　梅津恵華

・かな部（Ⅰ類）
京　絹子　利村郁子　都丸みどり
鍋島弘子

・かな部（Ⅱ類）
新谷嵐泉　高橋はるえ

・近代詩文書部
大西香蘭　酒井優子　佐藤弦佳
高橋四蓮　土橋芳子　西山裕人
平野笛舟　水木心雪

・刻字部
佐藤紫水　鈴木香風

・大字書部
阿潟浜里佳　東原春城　三沢明扇
寺内宏山

・前衛書部
岩上郁子　佐藤糾舫　須藤彰仁
土屋光燁　畠中成山　花里智子
藤崎桜花　山田明子

佳作賞受賞者

・漢字部（Ⅰ類）
生田珠翠　岩田誠華　上田琴秀
大川代香　影山扇葉　徳岡翠江
松田藍華　松本深泉

・漢字部（Ⅱ類）
大槻柏秀　小泉　潤　高木昭華
本郷谷恵　松浦智扇

・かな部（Ⅰ類）
戸来益江　森　直子

・かな部（Ⅱ類）
新井マキ子　小林嘉江　清水由紀子
都倉むつみ　平井智子　松岡啓子
山田静枝

・近代詩文書部
臼井真理　小川香燁　金子美千
金濱珀燁　木村順峰　後藤白琴
佐藤星沙　菅野映紅　鈴元博貫
千田春月　高橋成子　永井鳳雪
長島僊雨　貫名桂峰　波多祥舟
吉田景燁

・刻字部
赤羽蘭径　大沼樵峰　百田美智子

・大字書部
加藤明龍　木佐貫鮮水　清遠　瑞
永見史篁　馬場明咲　牧川逢扇
保原美風　山田征孝

・前衛書部
鮠名空心　大村直子　金井みどり
桑島有子　佐藤紅茜　鈴木春江
高橋清琳　田中草華　田名部茜香
野口加奈　原口菜華　伏津玲子
本間冨士子　和田敬子

U23新鋭賞

・近代詩文書部
後迫里保

・大字書部
堀尾有貴

U23奨励賞

・かな部（Ⅰ類）
北爪美沙希

・近代詩文書部
林　弘純

・前衛書部
相内菜摘　高橋彩絵

表彰式（辻元実行委員長の挨拶）

書道芸術院主催出品者懇親会

枯樹賦（褚遂良）③

〈解説〉褚遂良の書法（褚法）の中で、枯樹賦や雁塔聖教序には筆の抑揚が強く表われ、いわゆる〈俯仰法〉という特徴ある筆使いを多くみることができる。

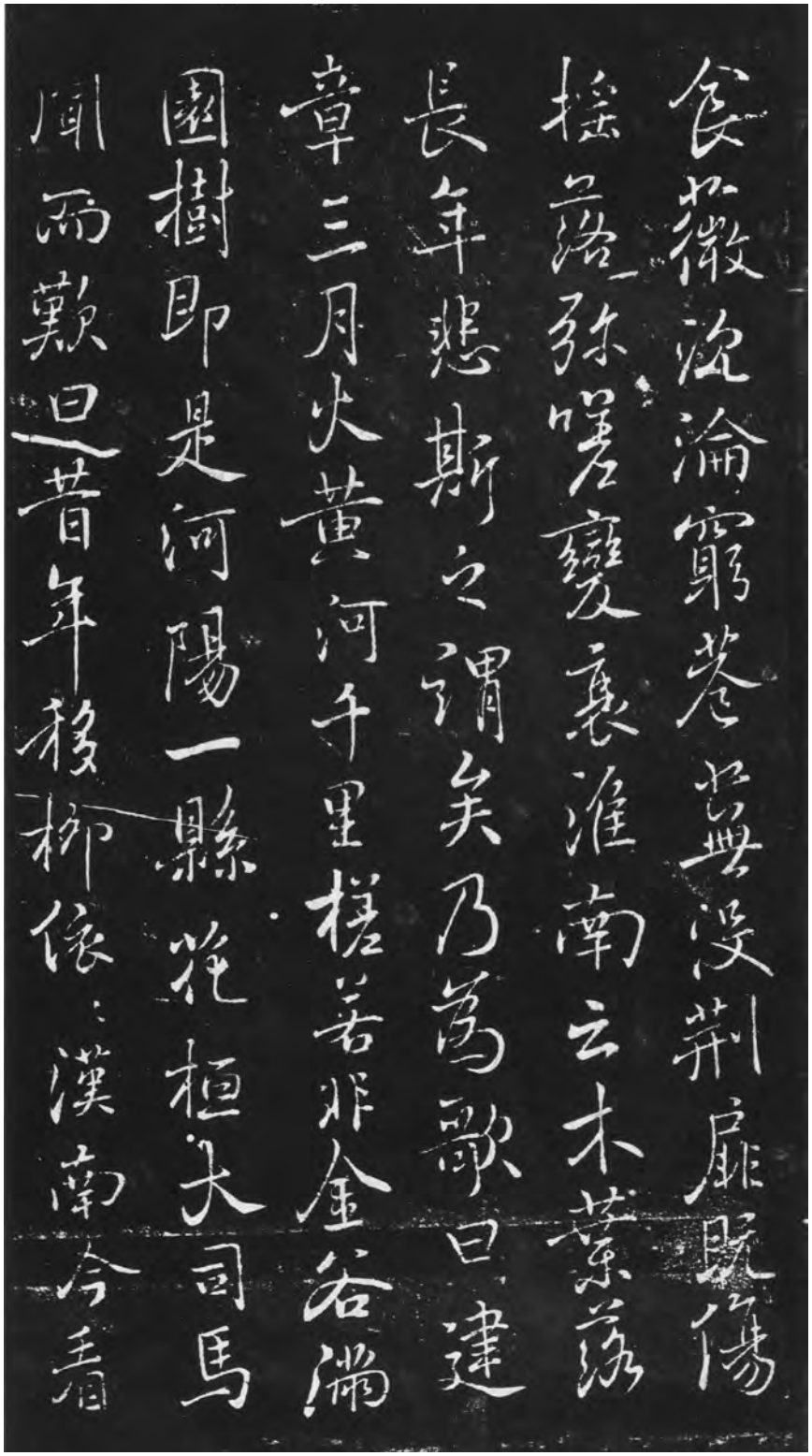
俯仰法は、筆の進む方向に筆管を倒す書き方である。横画を書くとき、起筆（始筆）でいったん左へ倒し、右に進むに従って進行方向へ筆を倒すと、掌は上を仰ぐ。また左払いの場合は、筆管は進む方向に倒れ、掌は俯す。このように進行方向によって掌が上を向いて仰いだり、下に俯すので俯仰法という。中国では、初唐の頃から俯仰法の使用が盛んになった。

褚遂良35歳のときの書、枯樹賦は王羲之の書法を継承しつつも、この俯仰法を交じえ、線に響きや緊張感を漲らせ、自然な動きを伴って暢達さをみせている。（編集部）

漢字研究部臨書課題
＝（半紙普通判・縦使用）左記の法帖より何文字臨書してもよい。

特別研究部臨書課題
＝（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）当該古典の左記掲載部分以外も可。

※落款を必ず入れる
署名、もしくは
○○臨
（押印のみも可）



（75％縮小）

食薇。沈淪窮巷。蕪没荆扉。既傷搖落。弥嗟變衰。淮南子云。木葉落。長年悲。斯之謂矣。乃爲歌曰。建章三月火。黄河千里槎。若非金谷滿園樹。即是河陽一縣花。桓大司馬聞而歎曰。昔年移柳。依々漢南。今看

古筆鑑賞

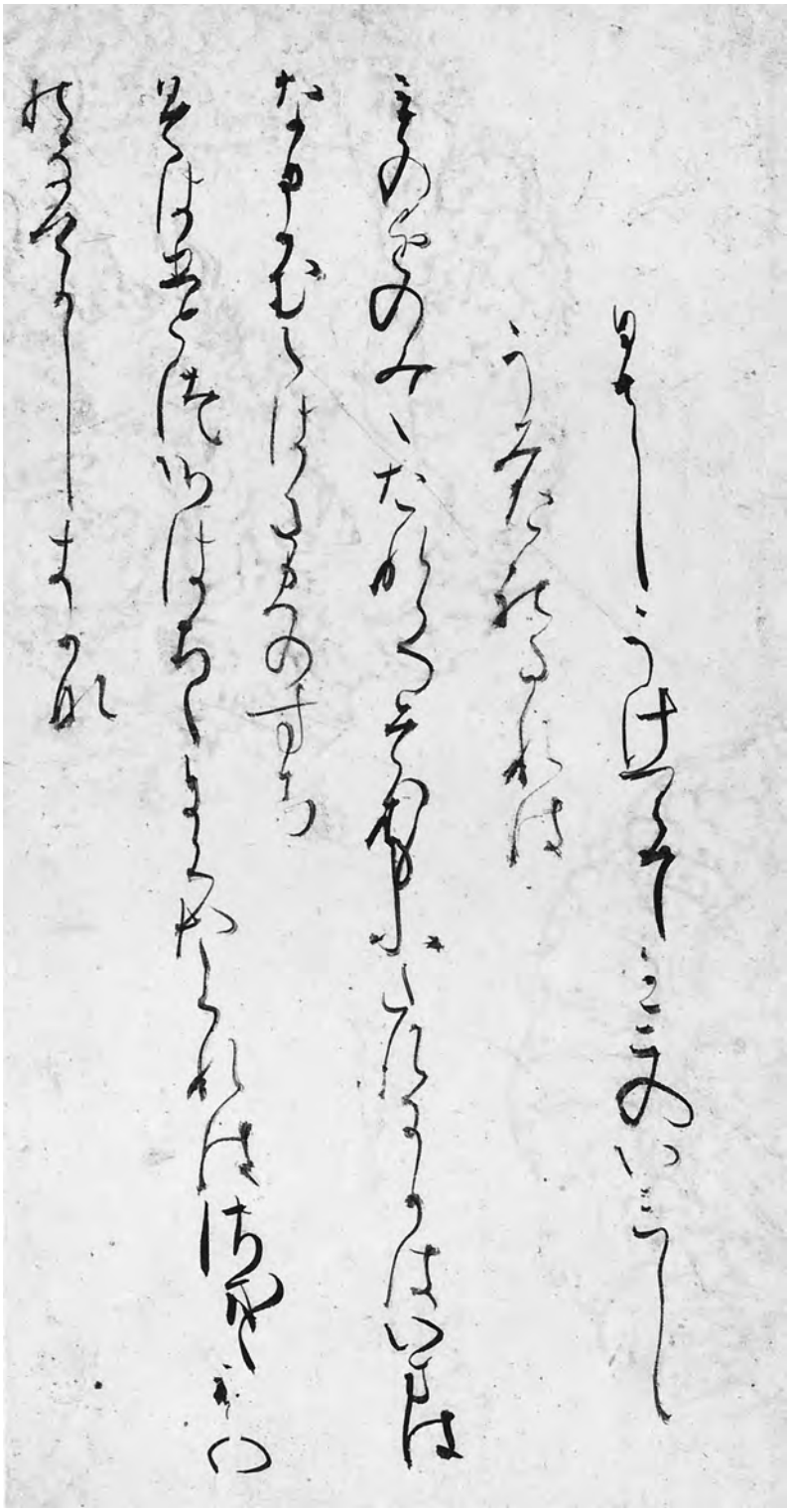
138

和泉式部続集上巻切（伝 藤原行成）

③

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨（押印のみも可）

〈よみ〉ひさしうけづらで、かみのいみじ　ものをのみゝだれてぞおもふたれにかはいまは
うみだれたれば　なびかむゝばたまのすぢ　みはひとつ心はちゞにくだくればさまゞ〳〵もの
のなげかしきかな



〈解説〉和泉式部続集切は関戸本古今集の系統に属している。伝小野道風筆「本阿弥切古今集」、伝藤原行成筆「針切」、伝源道済筆「小堀切」、伝西行「一条摂政集」などと書風が近似していることから、11世紀後半から12世紀前半の書写と推定される。

この和泉式部続集上巻切・下巻切は、もとは綴葉装の縦21.3、横14.5センチの冊子本と思われる。料紙は縦目の楮紙である。白または薄藍・茶などの色に、丸竜・牡丹・松などの型文様を、ところどころ空摺りにした珍しい料紙が用いられている。（編集部）

※掲載図版は原寸。

（半紙普通判（料紙可）・縦長に使用）

かな研究部臨書課題

＝別紙を裁断して貼付も可。半懐紙は半紙サイズに切って使用のこと。左記の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。（全臨も可）

特別研究部臨書課題

＝（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）左記の掲載以外も可。

漢字規定　初段以上【十月十五日締めきり】用紙　半紙普通判

小竹石雲選書

醉月宜對韻人　よみ（月に醉うは宜しく韻人と対すべし）

書体＝自由

習い方解説（六）

小竹石雲

醉月宜對韻人　（幽夢影）
（月に醉うは宜しく韻人と対すべし）

行草が多かったので最終回は隷書の参考を書した。隷書は篆書の時間のかかるものより、速書きできる書体として生まれた。隷書は古隷・八分隷と呼ばれるものと草隷などがある。今回書したものは、安定感のある構築性に、木簡・竹簡で見られる自由さを交えた表現とした。線は雄渾にして、落ち着いた篤実な雰囲気のものを心がけた。

●注意点

・基本的には蔵鋒にし、線が深くなるようにじっくり落ち着いて運筆した。

・横画は右上がりを避けて水平になるように、縦画は垂直を基本とした。左払いは蔵鋒で大胆に、転折は横画を書いた筆をいったん抜き、そこにつなげるように改めて蔵鋒で縦画を書くようにした。

漢字規定 秀級以下【十月十五日締めきり】用紙 半紙普通判

大隅晃弘選書

見賢思齊　よみ（賢を見ては齊しからんことを思う）

書体＝楷書

習い方解説（六）

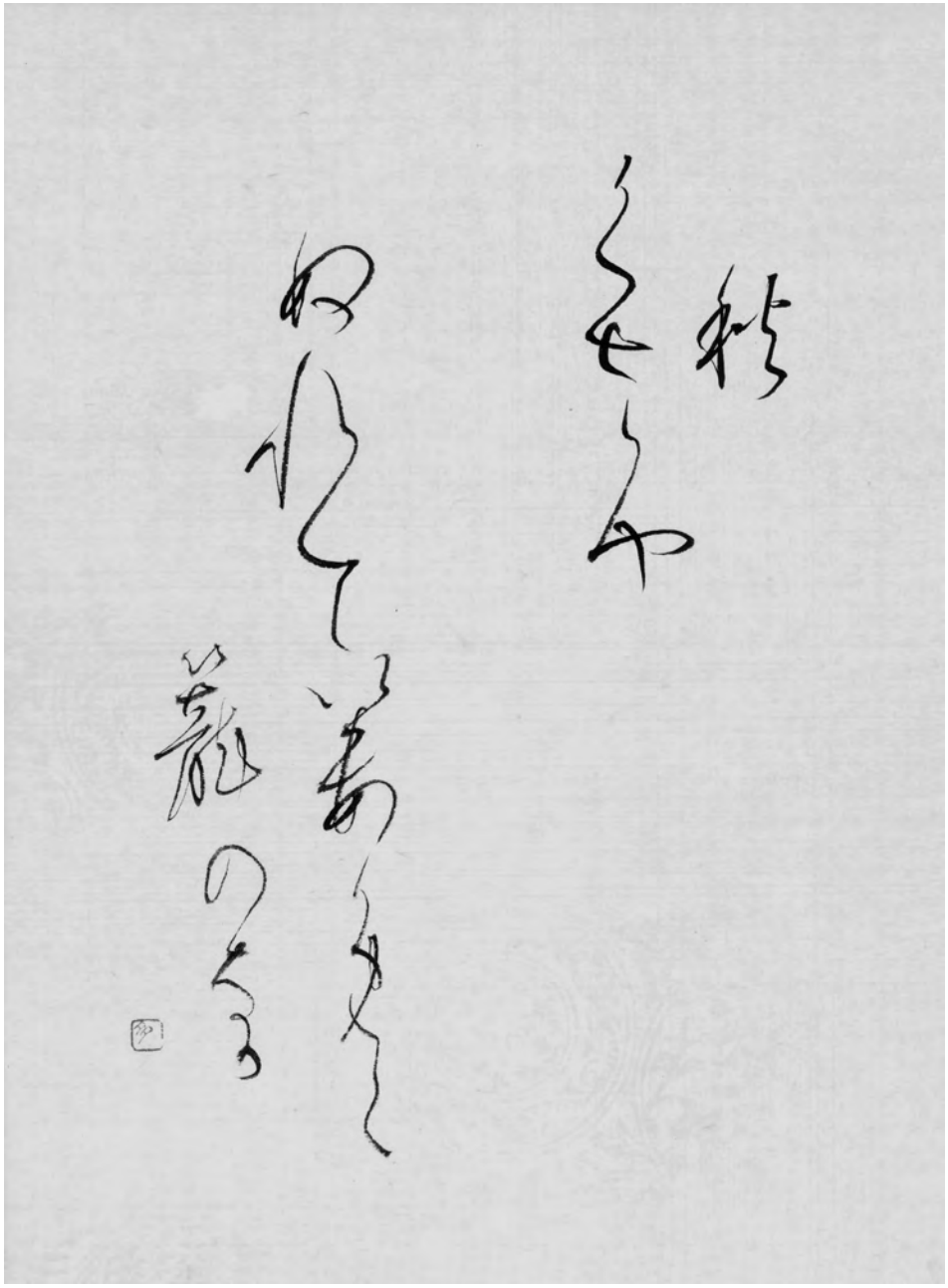
大隅晃弘

見賢思齊　（論語）
（賢を見ては齊しからんことを思う）

顔真卿の楷書を参考に書作しました。一碑一面貌といわれる顔真卿の楷書碑は蚕頭燕尾という独特の共通項を持っていますが、正攻法での引用は単調な表現になりかねないため、敢えて大胆な抑揚をつけての書作を試みました。

書の学びの柱が臨書であり、仰ぐ師風の模倣であることを考えると、好み信じる優れた書に近づこうとする意識こそが、書作の大きな原動力になっているのだと理解できます。しかし、古典を敷き写し、師のモノマネに終始することが、書作の本質ではありません。古典や師風を追いつつも、それとは異なる独自性を養うことが大切です。書家の心底にある野心は、古典を超える独創的な書を後世に残すことなのですから。

かな規定　初段以上【十月十五日締めきり】用紙　半紙普通判（料紙可）　大辻多希子選書



よみ方　秋く(久)さやぬれてい(以)ろ(婁)め(免)く(久)籠のな(奈)か(可)

創作

習い方解説（六）

大辻　多希子

秋草やぬれていろめく籠の中
（飯田蛇笏）

作品は筆や紙、墨により線が全く異なった表現となります。

半紙作品には、筆先の回転がなめらかで、筆鋒はある程度の長さのある柳葉筆が良いと思います。

いたちの毛は、強い弾力があり圧を軽くすると、しなやかに、筆先が自然にまとまってくれます。

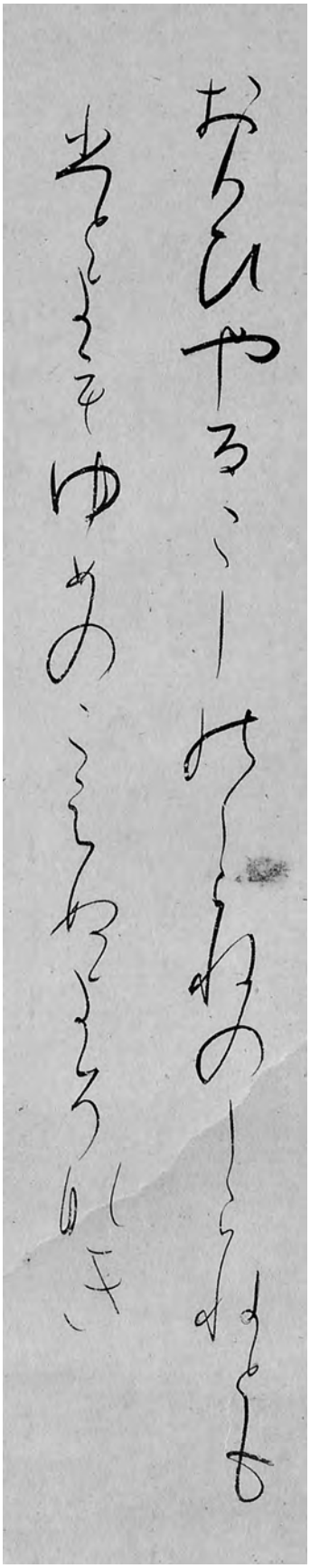
羊毛や玉毛筆は、あたりがやわらかく、筆先がしまりますが、あたたかく落着いた線質となります。

紙は、にじまない、改良半紙やロール紙の裏で練習すると良いと思いますが、あまりツルツルしすぎてすべり過ぎるものは避けましょう。自分に合う筆や紙を見つけることをおすすめします。

墨は墨液は避けて下さい。線に伸びが出ません。流麗なかな表現を目ざして下さい。

かな規定　秀級以下　【十月十五日締めきり】　用紙　半紙タテ1/2（料紙可）（たて32センチ・よこ12センチ）

掲載写真のうたを全臨、または部分（二字以上の連綿）を臨書する。



高野切第三種
（掲載写真縮小93％）

よみ方　おも(无)ひやるこしの(能)しらねのしらねども
ひ(悲)とよも(毛)ゆめのこえぬよそ(曽)な(那)き

かな条幅規定【十月十五日締めきり】　用紙　小画仙紙半切（料紙可）　善養寺紅風選書

よみ方　四五人に(二)月落ちかか(ゝ)るを(越)どりか(可)な(奈)　蕪村の句を　創作

習い方解説（三）

善養寺　紅風

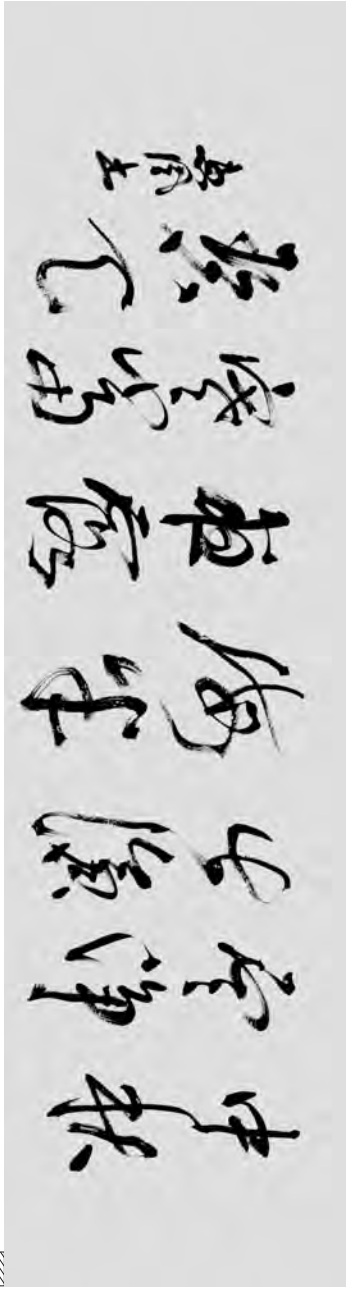
四五人に月落ちかかるをどりかな
（与謝蕪村）

夜が更けるにつれ踊りの人数が減り、四、五人のみが残り、踊り続けている。情景が浮かんで来るようです。句意を生かし文字の変換を少なくし、月で寄り添い一行のようにまとめました。単調にならぬように大らかに力強く運筆して下さい。

※たて形式に限る

漢字条幅規定　初段以上【十月十五日締めきり】用紙　小画仙紙半切

崎井恵風選書



中秋雲浄出滄海　半夜露寒當碧天（許渾）
（中秋雲浄く滄海を出で、半夜露寒く碧天に當る）

書体＝自由

出品券貼付位置

習い方解説（六）

崎井恵風

中秋の月は、雲はれた海上に昇り、露寒き夜半に天空にかかっている。許渾の詩です。澄みわたる秋の夜更けの広大な情景が浮かびます。横書きは、特に左右の行間の疎密・潤渇等の構成に気を配りながら制作して下さい。

※よこ形式に限る

漢字条幅規定　秀級以下【十月十五日締めきり】用紙　小画仙紙半切

最首翠風選書

小窓半夜青燈雨　幽樹一庭黄葉秋（眞山民）
（小窓の半夜青燈の雨、幽樹一庭黄葉の秋）

書体＝自由

習い方解説（六）

最首翠風

参考手本は、いわゆる行草作品。一箇所連綿を入れてみました。よく使用される文字の草書体は覚えておくと便利です。又、辞書で必ず確かめてください。潤渇、文字の大小に気を配りました。

書体は自由ですから、勉強の段階に応じてとり組んでください。

――夜半燈火点る窓辺に雨が注ぎこんもりした庭樹は黄葉している。

ペン字規定【十月十五日締めきり】

牧泰濤選書

悟りという事は如何なる場合にも平気で死ぬる事かと思って居たのは間違いで、悟りという事は如何なる場合にも平気で生きて居る事であった。

（病牀六尺より）　泰濤書

用紙＝はがきの大きさ、白色のもの、**黒インク**使用のこと

書体＝自由

習い方解説（六）

牧泰濤

正岡子規の悟りは、平気で死ぬるという覚悟みたいなものでなく、逆に死ぬなどと考えずに「平気で日々生きること」を悟りと喝破したのでしょう。病牀に伏していてこそ、病気を当たりまえと自覚した上での悟りである。

「平気」とは①おちついておだやかな気持②物に動じないこと。威力や困難に負けないこと（広辞苑）とあるが、とてもむつかしい心状ではある。思想や観念よりも生命力は強い。どんなことがあっても「生きていける」と確信した人間は強い。

結局、「人間の目的は、生まれた本人が、本人自身でつくったものでなければならない」（夏目漱石「それから」）生き方も書道も、選んだ本人が自分自身でつくったものでなくてはならない。ということなのでしょう。一筆入魂の中でこそ会得できると思うのですが。

※落款を必ず入れる。
（**自分の名前**を入れること）

今月のホープ作品各部総評 NO.651

漢字部　師範　熊谷　桃華
暢達した筆致でリズムよく表現している。筆端の切れ味爽やかで明快な作で好感が持てる。
◎漢字部総評　上級5文字表現は全般的に萎縮したもの多し。半紙といえども紙面を広く使いたい。下級も同様。（大雲評）

かな条幅部　準師　尾形　紅霞
筆毛の弾力を生かし、リズムにのっての太細の加減が素晴らしい。初めが少々重くなったのは残念！
◎かな条幅部総評　比較的手本に忠実でよく書かれていたが、濃墨、墨量過多などまだ多い。濃淡や流れの美しさは必須。（洋子評）

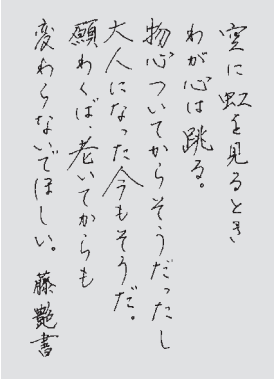
前衛書部　特選　蒔苗　真紀
緊張感ある線質で統一され充実した作品となっている。余白処理もすばらしい。
◎前衛書部総評　今月は作品点数が減となったが、素材の工夫等新しい挑戦があり頼もしい。（仙草評）

現代詩文書部　特選　岩崎　陽光
文字の大小と線質の変化、空間の美しさとリズミカルな運筆、呼吸が静かに聞えてくる。見事なり。
◎現代詩文書部総評　作風がマンネリズムになっている。独創性と新鮮さのある作品を!!（素雪評）

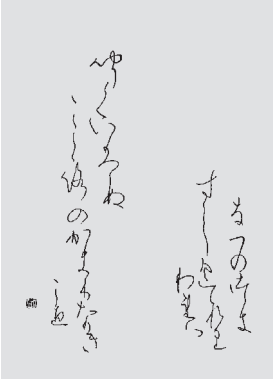
漢字条幅部　師範　笹木　蒼風
超濃墨を用い、大胆な筆法で豪快な書。気力の充実が筆力の強さを生み出した快作です。見事。

◎漢字条幅部総評　上級者は校字を確実にして創作して欲しい。誤字も少なからず見られた。着実な文字調べが大切です。（萬城評）

ペン字部　師範　金子　藤艶
線の切れ味良く、堂々とした字形になった。躍動感もあり、雄大さを感じさせる秀作。
◎ペン字部総評　全体的に平凡な作品が多かったように感じました。創意工夫を加えて、作品の制作を。力作を待っています。（鄭街評）

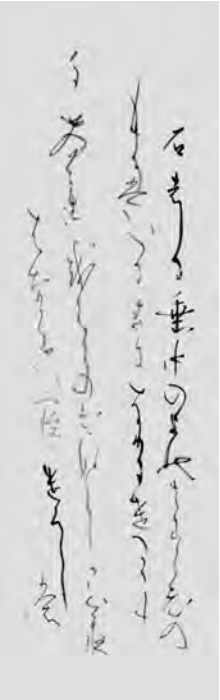


かな部　師範　永井　宏枝
参考手本の考察が行き届き、掌中に納めたものを丁寧に描き出して見事。目標の高さを感じる作。
◎かな部総評　漢字聞と変体がな路の誤字多く残念。流れを作る連綿線を十分見極めることでも誤字はかなり解消されます。（明子評）



今月の
特別研究部優秀作品（特選）

かな　（八街）　井上芝雲　「万葉二首」



井上芝雲書

177×55㎝

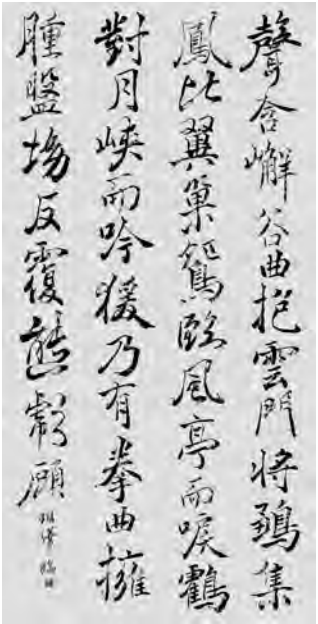
◆雰囲気が穏やかで温かい。長い渇筆が少々軽く映るが、構成、濃淡、大小など配慮が行き届いた力作。（洋子評）

◆潤渇の変化が効果的です。叙情性を含み、温か味を感じる渇線に癒されます。品性の高い作調です。（萬城評）

◆前半2行は行の変化、文字の大小もあり良いが後半の2行は線の変化が少なかったか。（蒼玄評）

◆字形、線質ともに穏やかで温かみのある紙面を醸し出している。3行目もう少し濃淡の変化がほしい。（紅瑤評）

臨書　（蒼原）　金濱珀燁　「枯樹賦」



金濱珀燁臨

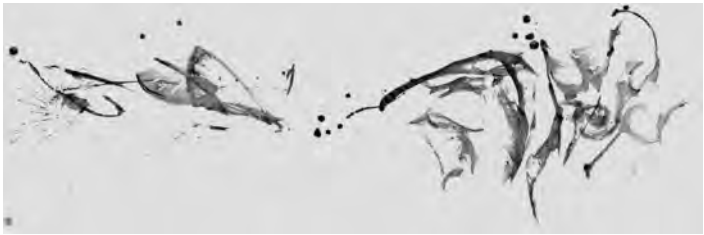
137×70㎝

◆長鋒柔毫筆を用いた、創意に富む臨書です。変化に富んだ動きある姿態が魅力的。表情が豊かです。（萬城評）

◆1本1本の線と、1字ごとの味わいを失うことなく全体をまとめた手腕に敬意。呼吸の深さが見所。（洋子評）

◆枯樹賦の特徴をよくとらえ意臨に近い臨書か。線質は長い筆を良く使いゆったりと表現できた。（蒼玄評）

◆長鋒羊毛筆を巧みに使い、枯樹賦の雰囲気をよく捉えている。表情豊かな線質が魅力。（紅瑤評）



大庭幸石書

60×180㎝

前衛書　（大拙社）　大庭幸石　「始動」

◆独特の淡墨で墨のにじみがないが、線はよく紙にくい込んで深い。後半（右側）は少し書き過ぎか。（蒼玄評）

◆横作品として、前半部と後半部の広がりが響き合い、よく空間をとらえた。余白も美しく明るい作品。（紅瑤評）

◆難しい横への連動だが、軽やかで浮遊感のある序奏から締めた線が蠢く。やや淡い墨色で明るく光る。（洋子評）

◆運筆速度に遅速の変化をつけ、多様なリズムの線が混在し複雑。墨色と合わせて立体感がある作品。（萬城評）

銭谷雪蘭書　48×165㎝

現代詩文書（祥紫）

銭谷雪蘭「夕焼け」

◆作品構成、余白を計算した作。行末のデフォルメに工夫がされ、その力量の高さが感じられる。（萬城評）

◆あえて行尾を揃え詩のイメージを具現化したか。タッチや行立ての趣でアンニュイさ出る不思議さ。（洋子評）

◆群構成の妙、濃淡も良くリズム感もあり良いが少々読みにくい字がある。特に中間部から後半。（蒼玄評）

◆余白を効果的に配置した構成見事。文字の造形にも工夫を凝らし、味わい深い作品となった。（紅瑤評）

前衛書（白珠）

高原梨秀「穹」

◆空間を大きく切って雄大な作となった。下の濃淡も良くまとめも良いが、印の位置もう少し右か。（蒼玄評）

◆筆先の瞬発力が生かされた線に冴えがあり、身が引き締る。作品中央部分の余白が大変美しく成功。（萬城評）

◆上部から中央部へのスピード感ある強靭な線条が見事。紙面に緊張感を生んでいる。余白・間が巧み。（紅瑤評）

◆花火か彗星か、弾かれたように勢いよく浮かび上がる魂。墨量や太細のバランスに秀でドラマチック。（洋子評）

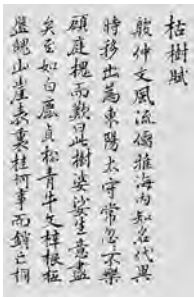
高原梨秀書　140×60㎝

臨書（東総）

薄田春緑「枯樹賦」

薄田春緑臨　34.5×137㎝

部分拡大



◆繊細で変化に富んだ枯樹賦の特徴を捉え、細字で着実に臨書している。真摯な取り組みに敬意を表す。（萬城評）

◆枯樹賦の概要を理解し、丁寧な姿勢が見事です。気持を平静に維持しての精神性の高さが汲みとれる。（洋子評）

◆真面目な取り組みで良く最後までリズムを保っている。俯仰の用筆を取り入れると柔かさも表現できた。（蒼玄評）

◆半切に枯樹賦を全臨。誠実な臨書態度すばらしい。線質がやや硬い。運筆の抑揚緩急の変化がほしい。（紅瑤評）

総出品点数 84点

創作の部（48点）
漢字―3点
かな―5点
現代―18点
篆刻―2点
前衛―20点
臨書の部（36点）
漢字―34点
かな―2点

〈特選候補者〉

（創作の部）
「かな」
書泉 京 絹子
卯月 新谷 嵐泉
「現代詩」
うる 菅原 房江
八街 熊谷 桃華
もく 西川 藤象
「前衛」
大拙 畠中 成山
秀水 坂井 初江
蓮紅 田村 紅沙
（臨書の部）
「漢字」
竜泉 小林 洋龍
大雲 神谷 雲卿
「かな」
高崎 飯島 律子

漢字研究部
（枯樹賦）

選評　名越蒼竹

今月のホープ作品

遊佐香風

漢字研究部　特選　遊佐　香風

繊細なタッチ、柔らかな動き、細線の食い込みと響き、文字空間の明るさ、半紙全体の構成バランス、いずれを取ってみても非の打ち所のない素晴らしい臨書作品で、感服しました。落款の位置と大きさにも神経が行き届いています。

◎漢字研究部総評

課題の文字が小さく、細部が分かりにくいところもあったと思います。見えるように書くのではなく、疑問に思うところは字典で調べてから書きたいものです。特に「陽」の字は「日」の部分の2画目が消えているため、書いていない作品が多く見られました。

鋒先の動きが繊細で独特の字形の歪みもあって運筆や形の取り方が難しかったと思います。鋒が開いたままのゆるい線や、動きの固い運筆にならないように気をつけたいものです。

永雅邦彩江哲恵春　篁雅子子子子景

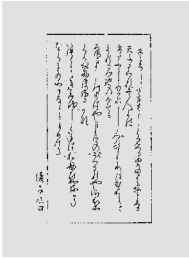
宥淑龍桃順陽　雨子峰華一子

桃琴輝雅和雪　子燁子裕夏蘭

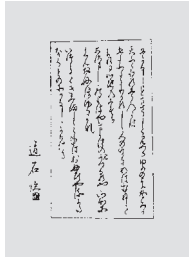
篁翠依沙緒紅　心江未理水雲

かな研究部
（和泉式部続集上巻切）

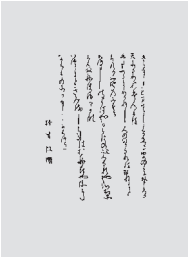
選評　佐藤希雲



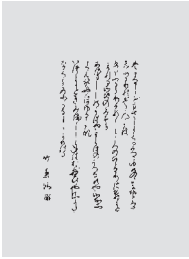
優子　佳代子　輝子



永南道　篁汀石



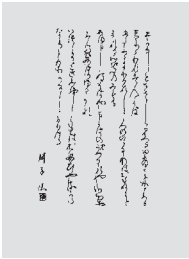
京幸幹　子雲生

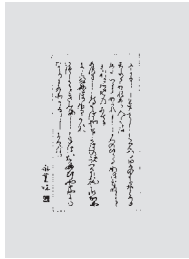


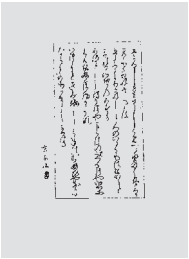
里喜竹　美子葉

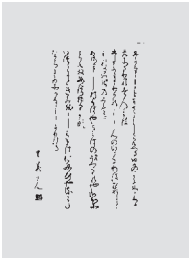
今月のホープ作品

後藤良泉









かな研究部　特選　後藤良泉

原寸大の臨書で、形をよく取っています。5・7行目下部の太く強い線が全体の風景を引き締め、和泉式部続集切らしさを出しました。品格高い作です。

◎かな研究部総評

難易度の高い古筆で、グイグイ筆圧を加え荘重感を出す必要があります。転折部では筆を立て穂先を紙面にしっかりと突き込んでリズムを作りましょう。

かな研究部成績表

特選

竜泉　蘭鼎　たか華　正石　広島　うるか　たま習　大雲　や切　ま柳　東切　京葉　幸雲　飯高　浜野　川本　犬飼　木原　梅津　佳代　川崎　優子　後藤　良泉

宗川　恵書　玉野　大本　正中　上華　や泉　ま祥　華陽　陽月　正光　雅芳　律子　宏枝　令子　絢水　里美　喜子　竹葉　京子　幸雲　幹生　永生　南篁　道石　輝子

秀作（60音順）

茂木　山江　永口　丸井　藤崎　江石　ゲ子　ミ子　ク子　ル子　ス子　ル子　ル子　ル